

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『太陽コーパス』における漢文系複合辞の使われ方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002776">https://doi.org/10.15084/00002776</a>

# 『太陽コーパス』における漢文系複合辞の使われ方

朱 京偉 (北京外国語大学)

## 1. はじめに

中国では、1950年代の末から借用語研究の動きが現われた。王立達氏が「現代中国語における日本語からの借用語」と題する論文で、日本語からの借用語を8種類に分類し、それぞれの実例をあげて説明したのが議論の始まりとなった<sup>1</sup>。同論文で示された日本語からの借用語は計587語に及び、一般語から専門語まで、しかも、二字漢語だけでなく、三字漢語・四字漢語も含まれている。当時において、質量とともに代表的な研究成果だといえる。

ここで注目したいのは、同論文で借用語の第7類としてあげられた「日本語を中国語に翻訳するときに、中国人によって創出された言い方」である。原文では、次のように述べられている<sup>2</sup>。

七、下面一些现代汉语词汇，是在我国人翻译日文时创造出来的。 訳文：以下の現代中国語の言い方は日本語を中国語に翻訳するときに、中国人によって創出されたものである

- 1) 基于 ( 二基イテ)
- 2) 关于 ( 二関スル, 二就イテ)
- 3) 对于 ( 二对シテ)
- 4) 由于 ( 二由ッテ)

以上为词尾是“于”的介词。 訳文：以上は“于”を語尾とする介詞

- 5) 认为 ( ト認メラレテ)
- 6) 成为 ( ト成ッテ)
- 7) 视为 ( ト視ナシテ)

以上为词尾是“为”的动词。 訳文：以上は“为”を語尾とする動詞

ここでとりあげたのは、語彙レベルの借用ではなく、「二基イテ、二関スル」などのように、構文要素となる日本語の複合辞が中国語に影響をもたらしたということである。王立達氏の論文が発表された後、“关于、由于”などをめぐって、日本語の借用語とはいえないといった反対の意見が出てきた<sup>3</sup>。これに対して、王氏は、確かに“关于、由于”などの語形が日本語にはなく、中国語独自の言い方なので、「借用語」というよりも「意識

<sup>1</sup> 王立達 (1958a) を参照。

<sup>2</sup> 王立達 (1958a) の p.94 を参照。本稿では、中国語と日本語の字体について、それぞれ原語のものを用いた。なお、中日双方のコーパスに出た旧字体も原文のまま取り入れた。

<sup>3</sup> 張応徳 (1958) を参照。

語」とすべきだと認める一方、この種の言い方は、日本語の「二関スル、二由ッテ」などを踏まえて造られたものだと、自説を再確認した<sup>4</sup>。王氏の論文から半世紀以上経ったが、当初の問題はほとんど進展が見られず、残されたままである。そのため、電子資料の利用が便利になった現在、もう一度この課題について考えてみるのが小稿の目的である。

王氏の説を検証するには次の二つが前提条件となる。まず、中国語の“关于、由于”などの言い方が日本語からの影響を受けて成立したものであれば、「二関シテ、二由ッテ」などは、中国が日本語から借用語を受容し始めた19世紀末までに、日本語で使用されていなければ、王氏の説が成り立たない。これに関する調査にあたって、『太陽コーパス』のデータはちょうど1895 - 1925年の期間をカバーしているため、好都合な資料だといえよう。また、日本語側の調査と同時に、近代以前の中国語においても“关于、由于”などと同形の用法が存在したかどうかを調べる必要がある。この作業に関しては《四庫全書》(電子版)の検索によって解決できると思われる<sup>5</sup>。

本稿では、さしあたり、日中双方の電子資料を使って基本的な事実確認を行なっておきたい。実施にあたり、次のことに留意した。

(1) 日中対応の観点からは、たとえば、「に限る」と“限于”，「に至る」と“至于”，「に属する」と“属于”，「に過ぎない」と“不过”，「に及ばない」と“不及”なども漢文系複合辞として同類扱いできそうであるが、小稿では、王立達(1958a)で言及された七つの表現だけを対象とする。

(2) 『太陽コーパス』にある用例をとりあげる場合、日本語からの借用語が中国語に移入される時期を考慮して、なるべく1895年または1901年のものを選び、しかも、活用変化の様相も見られるように留意した。

(3) 《四庫全書》の用例については、時代的分布や例文の分かりやすさを中心に考えて、適切なものを選んだ。また、筆者によって、文の区切り(句読点)と関連部分の日本語訳を付け加えた。

(4) 用例中の字体は日中双方の原本のままに用いた。たとえば、現代中国語では、“基于、关于、对于、由于、认为、成为、视为”のように表記されるが、《四庫全書》では“基於、關於、對於、由於、認為、成爲、視爲”となる。これは、新旧字体の違いだけで、意味と用法の変化とは関連がないと考えてよい。『太陽』の表記についても同様である。

---

<sup>4</sup> 王立達(1958b)を参照。原文では、“张同志认为‘关于’、‘由于’…等不应当看作是日语借词，这一点我完全接受。因为这些词从来源上说虽然与日语有直接关系，但因它们是我国人翻译日文时创制出来的，而不是从日语中借来的，所以按其性质来说，应当是意译词而不是外来词。我把它们列为日语借词的一项，是完全错误的。”と述べている。

<sup>5</sup> 『四庫全書』は清の乾隆帝の時、朝廷の監修によって編集された大規模の百科叢書である。秦以前の時代から清の前半期までの歴代の典籍が3460余種も収録されており、1781年に完成された。紫禁城の文淵閣に所蔵されていた『四庫全書』の版本は、すなわち『文淵閣四庫全書』である。同書の電子版は検索機能が備わっているため、18世紀前半までに存在していた漢籍語なら、手早く用例と所在の文献を見付けることができる。

## 2. に基づく / 基於 (基于)

### 2.1 『太陽コーパス』にある用例

『太陽コーパス』には、「に基づく・に基づき・に基づきて・に基づいて・に基づいた」などの形を含め、計 105 例が見られる。このうち、最も多い使い方は「に基づく」の 38 例と「に基づき・に基づきて」の 43 例である。現代語で用いられる「に基づいて」と「に基づいた」の形はそれぞれ 6 例しかなく、しかも、初出は 1901 年以後となっている。次は「に基づく」に関する用例である<sup>6</sup>。

人の之に求むるは自然の本性に基づくものなること明なり、(1895 年 7 号, 中島力造「道徳上の権利とは何ぞ」)

平均壽命に基づき, 掛金を定めて, 營業する生命保險會社は, 直接に失敗を招き, (1895 年 10 号, 志田钾太郎「戦争保險」)

籬島が自らいふところに據るに此書は宮古歳時記山城名所記行の二書に基づきて作るとあり, (1895 年 8 号, 饗庭篁村「都名所圖繪の板元」)

尚ほ此條約に依て獲得したるものは, 最惠國條款に基づける將來の利益及び清國內地に於て賣買自由の權利則ち是れなり。(1895 年 7 号, 添田壽一「日清戦争の經濟上の觀察」)

此の外交なるものは, 各國家の國是に基づいて定めらるゝものであつて, (1909 年 11 号, 林董君「世界に於ける各国外交の大勢」)

爾後棉花は成るべく米國から取り寄することを力めねばなるまいと勸告したのは右の理由に基づいたのである。(1917 年 13 号, 田健治郎「世界的經濟割據の趨勢と船舶管理令」)

『太陽』にある用例を検討してみると、現代語の「に基づく」とほぼ一致する用法で使われていることがわかる。「に基づく」の用例があまり多くないとはいえ、その使い方は『太陽』雑誌が出版される以前にすでに日本語に定着していたと見られる。そのため、「に基づく」の発生時期を明らかにしようとするれば、明治 20 年代からさかのぼって調査しなければならない。

また、『太陽』にある「に基づく」の用例を中国語に翻訳してみると、そのほとんどは現代中国語の“基于”を含む文に翻訳することが可能である。つまり、翻訳を通してみれば、「に基づく」と“基於(基于)”の間で意味上の対応関係が存在するのが一応確認できる。ただし、重要なのは近代以前の中国語には“基於”の言い方があったかどうかである。

### 2.2 《四庫全書》にある用例

《四庫全書》(電子版)で“基於”を検索すると、1349 例がヒットした。すべての用例が日本語の「に基づく」に対応するものとは限らないが、相当数の用例が確実に見られるということで、“基於”の使い方は近代以前の中国語にはすでにあったことが確認できる。以下では“基於”の用例をあげておく。

<sup>6</sup> 便宜上、以下では各種の活用形を一括して「に基づく」の形で表わす。本稿でとりあげるその他の漢文系複合辞についてもこれと同様な扱い方をする。

惟初得陽之一，志專應四而求比於五。以陽感陰，其誠易通。臨大之治，其基於此乎。  
（南宋張浚撰《紫岩易傳》卷 2，1158） 訳文：陽を以って陰を感じるなら其の誠は  
通じ易い。大に臨むときの治まりは、これに基づくかな。

諂者本以求福，而禍常基於諂，梁竇之客是也。瀆者本以交驩，而怨常起於瀆。（南  
宋項安世撰《周易玩辭》卷 14，諂瀆，1198） 訳文：こびるものは福を求めるつも  
りだが，禍は常にこびることに基づくもので，梁竇たちはこのような人だ。…

夫謙卑，德也。初卑位也。養德之地未有不基於至卑之所，所養也。至則愈卑而愈不  
卑矣。（南宋王宗傳撰《童溪易傳》卷 8，12 世紀末） 訳文：徳を養う地はいずれも  
至って卑しい所に基づくもので，これで養われるわけだ。…

天下之治不生於富庶之日，而常基於經營勞苦之時。亂不肇於板蕩之秋，而常伏於宴  
安逸樂之際。（乾隆皇帝弘曆撰《御制日知叢說》卷 1，1735） 訳文：天下の治まり  
は裕福の日から生まれるのではなく，常によく働いて苦勞する時に基づくものだ。

…

《四庫全書》にある“基於”の用例を調べてみると，“基於”の後にくる語句の長さは現  
代語と異なるものの，“基於”自身の用法は現代中国語のそれと大差がなく，一脈相通じて  
いることがわかる。また，これらの用例を日本語に訳すると，「に基づく」を含む文脈にな  
る確率が相当高いことが観察される。しかし，《四庫全書》にある用例は『太陽』雑誌の時  
代より全般的に古いため，常識的に考えれば，中国語の“基於”が日本語の「に基づく」  
に先立って成立した可能性が大きいと思われる。

### 3 . に関する / 關於 (关于)

#### 3 . 1 『太陽コーパス』にある用例

『太陽コーパス』には，連体用法の「に関する」の用例が 2227 例あるほか，「に關し・に  
關して・に關しては・に關しても・に關してゐる・に關してをり・に關しての」などの形  
を持つ用例は計 1549 例数えられ，両方を合計すると，3776 例になる。これだけの用例が  
見られるので，『太陽』雑誌が発行された 1895 年の時点では，「に関する」の用法がすでに  
日本語に定着していたと考えてよい。ただし，この複合辞的用法がいつ発生したかを探る  
には，『太陽』雑誌より前の時期にさかのぼって調べる必要がある。次にその用例をあげて  
おく。

- ① 茲に政治學術社會百般の事に關し時事に痛切なる問題に就て，朝野名流大家の卓抜  
精到なる議論を掲ぐ（1895 年 1 号，久米邦武「学界の大革新」）
- ② 人皆其の行の是非に關して，些の疑惑をも感ぜざるべく，且必ずや聲を揃へていは  
ん是れ善なりと（1895 年 02 号，坪内逍遙「戦争と文学」）
- ③ 例へば農業に關しては，彼の地租輕減の如き，假令正當なりとするも現時の經濟に  
於ては，特に勉めて之を行はんよりは須らく力を農業信用及農業教育の如き積極的  
保護手段に用ゐざる可からず，（1895 年 1 号，井上辰九郎「經濟的闘争」）

- ④ 一切の政策を此邊の寸法より割出して扨こそ朝鮮東學黨の問題より引續き，彼の國事改革の事に關しても我に對して國交際にあるまじき無禮を働かしことなるに，（1895年2号，福沢諭吉「福沢翁の時事意見」）
- ⑤ さういふ觀察は，いろ～な方面に向けることが出來ようが，それは略して英國の將來に關しての想像を少し述べて置かう。（1909年2号，姉崎嘲風「名士の英吉利觀」）
- 世間では未だ朝鮮の教育に關する事の外は餘り論究する人も無い様に見えます，併ながら此事は今より豫測して置く事が随分我々日本人に取つては大切な事と思はれます，（1895年1号，井上哲次郎「戦争後の學術」）
- 亞細亞に於て直接に露佛兩國の利害に關する問題に就ては露國に取りても將た佛國に取りても英國と協同一致相提携することは望ましき事なりと雖ども（1895年2号，海外彙報「露西亞」）

『太陽』にある「に關する」の意味・用法を検討してみると，現代日本語のそれとほぼ変わらないようになっている。また，「に關する」の用例を中国語に翻訳すると，大体，“關於（关于）”を含む文に訳せることも確認できる。つまり，翻訳を通して見れば，「に關する」と“關於”の意味上の関連性が一応認められるわけである。

### 3.2 《四庫全書》にある用例

《四庫全書》（電子版）で“關於”の用例を検索してみると，2075例がヒットした。このうち，意味を成さない文字列も多く含まれているとはいえ，“關於”の用法は近代以前からすでに中国語にあったことは事実として受け止めるべきであろう。その用例は次の通りである。

- ① 自序云，是傳略採經史關於好惡刑賞治道之大者，凡三百餘條，以繫於篇。（紀昀等編《欽定四庫全書總目》卷21，1789） 訳文：自序に曰く，この伝記はおよそ經史類から好惡・刑賞・治道に關する大きいものを300余条採り，各篇を繫いだ。
- ② 蓋古之言政者必合於禮，言禮者必關於政，如此後世，政在俗吏，禮在書生，遂不可復合，哀哉。（南宋項安世撰《項氏家說》卷6，12世紀末） 訳文：むかし政をとなえるものは必ず礼に合わせ，礼をとなえるものは必ず政に關わる。...
- ③ 容端所謂内顧，即回顧也。不端即斜視也。此等處，不但關於徳容，亦且有犯忌諱。（康熙皇帝撰《聖祖仁皇帝庭訓格言》，18世紀前半） 訳文：...これらの所は，徳容に關わるだけでなく，また忌諱を犯すことも有る。
- ④ 上古民淳事簡，事係於己，惟結繩以記之。事關於人，惟結繩以驗之。不必過為防慮，而天下已治。（清代蔣溥等編《御覽經史講義》卷8，1749） 訳文：...自分に係わることなら，ただ繩を結んでそれを覚え，他人に關わる事なら，ただ繩を結んでそれを験すだけだ。...

“關於”の用例は，時代を遡れば，“有關於”の形で出てくるものがよく見える。清以降になると，用例数の増加とともに，また，上掲の諸例のように，現代中国語の用法にかな

り近付いてくる。また，“關於”の用例を日本語に翻訳すると、「に関する」や「に関わる」などになる確率が高い。このことから、前述の日文中訳に続き、中文日訳の場合でも“關於”と「に関する」の意味上の対応が一応認められる。ただし、《四庫全書》にある“關於”の用例は、『太陽』雑誌の「に関する」より時代が古いため、中国語の“關於”が日本語の「に関する」から影響を受けたという前に、まず、逆の方向で、「に関する」という表現が“關於”から来ている可能性について考える必要があると思われる。

#### 4. に対する / 對於 (对于)

##### 4.1 『太陽コーパス』にある用例

「に対する」の用例だけで3104例見られる。また、「に対し・に対して・に対しては・に対しても・に對したる」などの形を持つ用例は5354例もあり、漢文系複合辞の中でも最大級の使用量を有している。このことから、「に対する」の用法が『太陽』雑誌の出版よりも早い時期にすでに定着していたことがわかる。その用例は次の通りである。

- ① 此れ正か、彼れ邪か、此の疑問に對して、最後の確答を與ふるは、一に卿等が目下の急務（1895年1号、坪内逍遙「戦争と文學」）
- ② 三國より日本政府に對し、其の遼東半島を永久に占有するは、東洋平和のために非ずと申込めるは、實に四月二十三日なり（1895年6号、政治「日本と三國との交渉」）
- ③ 而して従來歐米人に對しては、既に開港したる重慶港を、新たに開放すと明言するは、無用の條件なるに似たるも、實は然らず、（1895年5号、商業「新條約に伴ふ通商上の利益」）
- ④ 英國は、支那に對しても、亦久しく此政策を執れり。（1895年1号、尾崎行雄「對清政策」）
- ⑤ 通商上列國に對する關係益々頻繁を加ふべきや逆睹すること寔に易々たり、（1895年1号、井上辰九郎「經濟的鬭爭」）  
故に將來我帝國は清國に對する用意より論ずるも、一般尚武的精神を遍ねからしむるの必要あるのみならず、（1895年1号、千頭清臣「戦勝後の教育」）  
祖父母父母に對したる殺傷の罪は特別の宥恕及び不論罪の例を用うることを得ず（1901年3号、岡田朝太郎「法律時評」）

日本の国語辞典には「対する」の解釈として、「二つのものが向かい合う」と「対象とする」の2項目があるが、その区別については、前者は具象的事物の関係を表わす場合で、後者は抽象的事物の関係を表わす場合をさすだろうととらえられる。『太陽』雑誌では、「に対する」の用法は、ほとんど後者の意味に使われており、現代日本語の用法とも一致する。また、「に対する」の用例を中国語に翻訳してみれば、大体、現代中国語の“对于”を含む文になることから、日文中訳の場合は、「に対する」と“对于”の間で、意味上の対応がなされていると考えてよい。ただし、その影響関係を解明するには、近代以前の中国語に“對於”の用法があったかどうかを調べるのが前提になる。

#### 4.2 《四庫全書》にある用例

“對於”を《四庫全書》で検索してみると、1939例がヒットした。これによって、近代以前の中国語には“對於”の語形が存在していたことが確認された。ただし、用例を実際に検討していくと、“對於”が種々の意味に使われていたことに気付く。その用例は次の通りである。

- ① 生地黃搗爛，煨熨於有瘡處，更妙用陰二陽四丹，對於有瘡處吹。（唐代孫思邈撰《銀海精微》卷上，682） 訳文：…さらに「陰二陽四丹」を巧みに用いて、腫れ物の所に向かつて吹くようにする。
- ② 十二年春，亮悉大衆由斜谷出，以流馬運，據武功五丈原與司馬宣王對於渭南。亮每患糧不繼，使己志不伸。（西晋陳壽撰《三国志・蜀志》卷5，3世紀後半） 訳文：武功の五丈原を占拠し、渭南で司馬宣王に對抗していた。
- ③ 凡助祭者，實皆秉持文王之德，對於文王在天之精神。（南宋宋林撰《毛詩講義》卷9，1190） 訳文：凡て祭を助けるものは、実はみな文王の徳を持って、天国に在る文王の精神に対応している。
- ④ 以水火對於乾坤，成乎四象，不易之理氣也。（清代魏荔彤撰《大易通解》卷6，17世紀後半） 訳文：水と火で乾坤に対応して，四象を成すのは変わらない理の氣だ。惟守此中道，利害有所不計，而常奉敬謹之心，以對於神明。則憂患之至，皆所以增益其所，不能而何咎之有乎。（清代程廷祚撰《大易擇言》卷22，18世紀前半） 訳文：…常に敬謙な心を奉って、神様に応えている。

以上の用例でわかるように、《四庫全書》にある“對於”は、日本語の「に対する」と違って、抽象的事物の関係を表わすというよりも、むしろ、「向かい合う・對抗する・応える」などの具体的な動作動詞として使われていたと見られる。そのため、日本語の「に対する」に直訳できるものはいくつか少なくなっている。これに先立って、『太陽』にある「に対する」がほぼ現代中国語の“对于”に直訳できると述べたが、日文中訳と中文日訳の結果を比較すると、両者の相違が顕著に見られる。

《四庫全書》にある“對於”の用例が『太陽』雑誌の「に対する」よりも年代が古いので、中国語の“對於”が漢文訓読によって日本語の「に対する」の形になり、しだいに定着したという経緯が考えられる。ただし、日本語に定着した後の「に対する」は、漢籍の用法から徐々に離れ、具体的な動作動詞ではなく、抽象的事物の関係を表わすようになったと推測される。『太陽』にある「に対する」の用例は、まさに意味・用法の変容を遂げた後の状況をよく表わしているものといえよう。

一方、現代中国語における“对于”は、すでに《四庫全書》時代の用法から遠ざかって、どちらかといえば、『太陽』雑誌や現代日本語のそれに近付いている。この変化の裏には明治以後の日本語からの影響があったかどうかについては、20世紀初期から増え始めた日本語から中国語に翻訳された出版物を調べることによって解明する必要がある。

## 5. に由る / 由於 (由于)

### 5.1 『太陽コーパス』にある用例

日本語の「に由る」には昔から幾通りの漢字表記が用いられてきた<sup>7</sup>。中国語の“由於”との対応を考えて、「に由る・に由り」などの語形で検索してみると、連体用法が中心となる「に由る」は269例あるほか、「に由り・に由りて・に由りては」などの活用形を含む用例は計308例見られる。ちなみに、その他の漢字表記が用いられた「に由る」についても調べてみた。たとえば、「に依る・に依り」系の用例は2197例見られ、「に因る・に因り」系は425例で、「に據る・に據り」系は325例となっている。

一方、漢字表記のない「による・により」で検索すると、「による」は622例であるが、「により・によりて・によりての・によりては・によりても」などの活用形では、計2675例にも及んでいる。これを踏まえて、漢字表記のない「による・により」は『太陽』の時代から主流となっていたことが指摘できる。つまり、王立達(1958a)で言及した中国語の“由於”と日本語の「に由る」の対応は、たとえ事実であったとしても、少数の用法との対応になるわけである。以下では、「に由る・に由り」の用例のみあげておく。

- ① 巴里の五銀行は、露國政府の保證に由り、四分の利と九十乃至九十二の價格(券面百圓に對し九十圓乃至九十二圓)を以て、一千六百萬磅(約一億六千萬圓)を清國政府に貸與するに決せり。(1895年7号、時事「日露新條約成る」)
- ② 蓋し人は境遇に由りて思想を變ずるものなれば境遇に由りて好尚を異にするは吾人が往々實驗する所なり然れども(1895年4号、大江敬香「明治詩家評論」)
- ③ 例へば官吏の登庸試験は、優者を登庸する所以に異ならずと雖も、試験官たる淘汰者の如何に由りては、反對の結果を見ることなしとせず、(1895年3号、千頭清臣「戦下・側面的觀察」)
- ④ 然れども通して之を論ずるに、目に由る記憶、耳に由るよりも易きは、疑を容るゝを得ず、(1895年1号、三宅雪嶺「漢字の利害」)
- ⑤ 將士の忠勇義烈に由ると雖も、抑もまた軍隊組織、作戰計畫等の其の宜しきを得たるが故にして、(1895年9号、大岡育造「新製艦案」)

上掲の用例でわかるように、『太陽』にある「に由る」は現代日本語の用法とほとんど変わらないようになっている。ただし、「に由る」の用例は現代中国語に翻訳してみると、必ずしも中国語の“由於”を含む文脈になるとは限らない。王立達(1958a)では“由於”が「に由る」を翻訳するとき中国人によって造られたものだとしているが、『太陽』の用例で検証した結果、「に由る」と“由於”の間で、一対一のような対応関係が常に存在するわけではないことが明らかになった。

### 5.2 《四庫全書》にある用例

《四庫全書》(電子版)で検索すると、“由於”の用例は7646例も数えられている。それに、用例が上古から清の時代まで広範囲に分布していて、昔から中国語にあった表現であ

<sup>7</sup> 山田孝雄(1935)は第29項で、漢籍中の「由・因・緣・仍」などの訓読法と「よりて」の影響関係を論じているが、「由於」についての言及がない。

ることが立証できる。また、《四庫全書》にある“由於”の用例を検討してみると、現代中国語の“由于”とほぼ同じ意味・用法で使われていることから、“由於”の用法は古代から現代まで一脈通じていることがわかる。次にその用例をあげておく。

- ① 制度明則民用足，制度不明由於名不正。正名之道，所以明上下之稱班，爵號之制，定卿大夫之位也。（東晋袁宏撰《后汉紀》卷 16，4 世紀中期） 訳文：制度が明らかであれば庶民の物資が足りるが、制度が明らかでないのは名が正されていないことに由る。
- ② 或因罪而致高，或處危以成名。所以天災屢降，治道未寧，皆由於此也。（東晋袁宏撰《后汉紀》卷 18，4 世紀中期） 訳文：…天災に度々見舞われ、統治が未だに安泰でないのはみなこれに由るものだ。
- ③ 婦人之病，皆由於月病生産所致，又從胞胎所起。（唐代王焘撰《外台秘要方》卷 34，752） 訳文：婦人の病気はみな月経や分娩に由って起きたもので、…
- ④ 古者，人稠地狹而有儲蓄，由於節也。今者，土廣人稀而患不足，由於奢也。（北宋司馬光等撰《資治通鑑》卷 81，11 世紀後半） 訳文：昔は、人口が多く土地が狭いのに貯蓄があるのは節約に由るものだが、今は、土地が広く人口が少ないのに物不足になるのは奢侈に由るものだ。
- ⑤ 然中風病不論寒多風多，大槩由于虛故，首尾不脫虛字，而淺深則自不同耳。（清代徐彬撰《金匱要略論注》卷 5，1671） 訳文：脳卒中は寒気や風邪を問わず、だいたい虚弱に由るためだ。

注目したいのは、《四庫全書》にある“由於”の用例を日本語に翻訳すると、大体、「に由る」を含む文脈になることである。これに先立って、日文中訳では、「に由る」を中国語に翻訳すれば、“由於”を含む文脈になる場合もあれば、ならない場合もあることを述べたが、これに対して、中文日訳では、いま指摘したように、“由於”が日本語の「に由る」になる確率が高いので、両方のアンバランスがはっきり見受けられる。

なぜ日文中訳と中文日訳では対応関係の一致度が異なるだろうか。この点については、“由於”と「に由る」の影響関係と関連付けて考える必要がある。“由於”の用例には相当古いものが見られるので、おそらく、“由於”の言い方が漢文訓読によって日本語に移入され、「に由る」の形で定着した経緯があったかと思われる。「に由る」は漢籍の“由於”に由来しただけに、中文日訳では中国語の“由於”が日本語の「に由る」に訳されやすいことにつながったのではないか。一方、「に由る」は徐々に用法上の変容が進み、現代中国語の“由于”でカバーしきれない部分が出てきたため、日文中訳では、「に由る」の訳が“由于”になったりならなかったりする現象が現れたと考えられよう。むろん、この推論を実証するには、19 世紀末に中国で起きた日本書の翻訳ブームにおいて、「に由る」の文脈はどのように中国語に翻訳されていたかを実際に調べる必要がある。

## 6. と認め / 認爲 (认为)

### 6. 1 『太陽コーパス』にある用例

『太陽コーパス』には、「と認め・と認めて」を主とし、「と認めず・と認めざる・と認

めた・と認めらるる・と認められ」などの少数用法を合わせて、計 289 例の用例が見られる。ちなみに、王立達（1958a）では、中国語の“認爲（认为）”は日本語の「ト認メラレテ」の訳語にあたるといった考えを述べたが、『太陽』には「と認められて」の用例が見当たらなかったため、よく使われる表現ではないことがわかる。現代日本語では、「と認める」を複合辞として扱うことはないようだが、ここでは、中国語の“認爲”との関連を考えると、この目的で、「と認める」をとりあげることにした。その用例は次の通りである。

- ① 愛知縣廳は右畫様を以て風俗を壞亂するの恐あるものと認め、其發賣の自由を抑へしかば、(1895 年 7 号、海内彙報、法律界「裸婦人畫問題」)
- ② 本邦にては土壤を以て作物に肥料を與ふるの機關と認めて各作物に之を施すを常とせり(1895 年 5 号、農業、矢部規矩治「本邦の氣候と施肥の關係」)
- ③ 是が則ち時勢の大躰經濟社會の全部に於て政府は最早や國立銀行延期の必要なしと認めたのであります、(1895 年 2 号、商業「國立銀行問題」)
- ④ 之を概するに彼等の眼には、戰爭は一の兇事と認めず、寧ろ殖民出稼の如く思惟し、相争ふてその役に就く。(1895 年 7 号、藤田精一「蒙古大王拔都の西歐侵掠」)
- ⑤ 工業の本領に着眼するの遅き、吾人は之を以て我が經濟界の不幸と認めざるを得ず。(1901 年 9 号、輿論一斑「工業政策」)

『太陽』雑誌の範囲では、文中用法の「と認め・と認めて」の形の用例が多く、「と認める」の形で文末に置かれる用例が少数に止まっている。このことから、「と認め・と認めて」のような文中用法が典型的な形と考えられ、しかも、その用例を調べてみると、現代日本語のそれとほぼ変わらないようになっている。

また、中国語の“認爲（认为）”との対応関係について検討してみると、文中用法の「と認め、と認めて」が中国語に翻訳される場合、基本的には“認爲（认为）”を含む文脈になれるが、一方、文末用法・連体用法の「と認める」は、“認爲（认为）”に訳されるものもあれば、原文の文脈によっては“認爲（认为）”のかわりに、“承認”などで訳さなければならないものもある。その理由として、「と認め」が複合辞化しておらず、動詞「認める」の本来の意味が保たれているため、置かれた文脈に左右されやすいことが考えられる。

## 6.2 《四庫全書》にある用例

《漢語大詞典》には“認爲（认为）”の見出し項目があり、“対人或事物确定某种看法，做出某种判断。”（人や物事に対して見方を示したり判断を下したりすること。）という語釈とともに、近代以前の用例も掲載されている。これは、ある意味で、中国の古典にはすでに“認爲（认为）”の語形があったことを示したものである。これを裏付けるために、さらに《四庫全書》で検索すると、663 例がヒットした。その用例は次の通りである。

- ① 今人只為誤將壯字認為好境，故全局皆差。（明代魏濬撰《易義古象通》卷 5，17 世紀初） 訳文：今の人は誤って「壯」の字だけを佳境と認めているので、全般的に劣るわけだ。

- ② 父祖質産於人，子孫不能繼贖，更數十年，時事一變，皆自陳於官，認為故産。吾安得言質而復取之？（明代陈邦瞻撰《宋史纪事本末》卷 20, 1605） 訳文：…さらに数十年も経って時事が一変すると，みな自ら官庁に申し立てて，自分の古い財産だと見なしてもらおうとする。
- ③ 回民三百餘戸，懇請回家，収割田禾。恐本庄及沿途村民認為賊黨，致被擒拿。（清代纪昀等编《钦定石峰堡纪略》卷 15, 1789） 訳文：恐いのは，この村または沿道の村人に泥棒と見なされて，捕まえられてしまうことだ。
- ④ 而李時珍認為一物，亦不知玉蘭用辛夷接植而成，皆未深考又伏讀。（清代嵇璜等撰《钦定续通志》卷 176, 1785） 訳文：しかし，李時珍は同一の物だと見なし，また，玉蘭は辛夷との接木によってできたことも知らなかった。

“認為”の用例を検討してみると，そのあとに続く目的語が文か語かという構文機能で，現代中国語とややずれているものの，“認為（认为）”自身の意味に関してはほとんど差がないように思われる。つまり，近代以前の“認為”と現代中国語の“认为”の間には，意味・用法上のギャップがなく，一脈相通じているとよい。

ただし，日文中訳の場合では，日本語の「と認め」は大半，中国語の“認為”に翻訳されると前述したが，それに比べて，中文日訳の場合では，中国語の“認為”が日本語の「と認め」に訳されることもあるものの，それよりも，「と見なす，と見なされる」などの訳になるケースが案外多いようである。いわば，“認為”と「と認め」の間では一致度の高い対応関係が見出せないということになる。一方，現代中国語の“認為”が果たして日本語の「と認め」の影響を受けて成立したものかどうかについては，20世紀初頭の日文中訳の实例を細かく調査し，「と認め」が“認為”に訳されていたかどうかの実態をとらえる研究が求められる。

## 7. と成る / 成爲（成为）

### 7. 1 『太陽コーパス』にある用例

検索した結果，「と成り・と成りて・成りぬ・成りける」などを合わせて 76 例があるほか，「と成る」は 53 例見られる。また，王立達（1958）には言及しなかったが，同じ漢字表記を有する「に成る」や「を成す」も中国語の“成爲”（成为）と対応する可能性もあるので，これらについても調べてみた。その結果，連体・文末用法の「に成る」だけで 198 例見られるほか，「に成り・に成りて・に成りては・に成りし・に成りたる・に成ります」などを含め，計 200 例ほど数えられる。

一方，同じ用法で，仮名表記の「となり」と「となる」はそれぞれ 4413 例と 2484 例に達しているので，漢字表記の「と成る」や「に成る」はどちらも主流の用法ではないことがわかる。王立達（1958）では，中国語の“成爲”（成为）が日本語の「と成る」を中国語に翻訳するとき造られたものだというが，そうであれば，仮名表記のない「となる」はどのように中国語に訳されていたかといった疑問に答えなければならない。

また，「を成す」は 142 例で，「を成し，を成して，を成したり，を成したる」などの活用形を持つ用例は計 199 例となっている。次に「と成る」「に成る」および「を成す」の用例をあげておく。

- ① 後同銀行社員と成り，廿二年辭職して東京朝日新聞社に小説の筆を執らるゝことを遺漏したれば之に附記す。(1895年2号，幸堂得知「古今演劇談」)
- ② 余が一等書記官と成りて使節に歐米に従はん事を勧め給へり，(1895年4号，史傳，福地源一郎「維新の元勳」)
- ③ 是等の人々の中には遠足旁々慰みを主として行くも有り，何か玩弄物と成る物を獲ようと云ふ好事心に促されて行くも有り，(1895年9号，坪井正五郎「石器時代遺跡の實踐は人類學上如何なる利益有りや」)
- ④ 正字通，字彙，佩文韻府，康熙字典等，皆明清の間に成り，近時に至りて又語法音源の出づるあり。(1895年3号，三宅雪嶺「字音の標準」)  
大使の米歐回覽實記は多く君の手に成ると云、方今職を辭して著作に従事せられ、(1895年1号，久米邦武「學界の大革新」)  
蓋し絶大の人物は絶大の事業を成し，絶大の事業は絶大の人物を生じ，(1895年1号，中西牛郎「日本帝國の任務」)  
社會全般の事物は社會を成す所の國民の事業なれば，國民の性質智能を明かにし，(1895年2号，坪井九馬三「史料の編纂は目下の急務たるを論ず」)

『太陽』にある「と成る」「に成る」や「を成す」の用例を検討してみると，1895年の時点では，この三者の用法はすでに現代日本語のそれとほぼ一致していることがわかる。したがって，この三者の発生期を求めようとすれば，『太陽』以前あるいは明治初期に遡って調べる作業が必要になる。また，中国語の“成爲”(成为)とこの三者の対応について見ると，「と成る」の用例が中国語に翻訳されると，漢字表記の“成”に引かれるせいか，“成爲”になることが多いが，「に成る」の用例は漢字表記のない「になる」の多岐的な用法と混同しているため，その大半はむしろ“成爲”以外の訳になっている。「を成す」は他動詞的な文脈を構成するのが普通なので，中国語の“成爲”で訳されることはあまり多くないように見られる。

## 7.2 《四庫全書》にある用例

《四庫全書》で“成爲”を検索してみると，3840例がヒットした。その中で，10世紀以前の用例も少なくないが，宋代以降の用例なら，もっと現代中国語の用法に近付いているといえる。その用例は次の通りである。

- ① 奇偶之策，總而言之有三百六十。是故，聖人因其乾坤奇偶之數成爲一歲，凡三百六十日也。(北宋胡瑗撰《周易口義》系辭上，11世紀前半) 訳文：そのため，聖人はその乾坤や奇偶の数によって一歳と成り，すべてが三百六十日だ。
- ② 正月三陽既上，成爲乾卦，乾體在下，三陰爲坤。(南宋真德秀撰《西山讀書記》卷37，13世紀初) 訳文：正月には三陽が既に上がって，乾の卦と成る。...
- ③ 管子云，一農之事，必有一銓一椎，然後成爲農。(明代徐光啓撰《農政全書》卷21，1639) 訳文：管子が云わく，農民とは必ずくわとつちがあってはじめて農民と成る。

惟君子能自强不息，亦惟自强不息，乃成爲君子。(清代蒋溥等编《御览经史讲义》卷1, 1749) 訳文：…また，自らずっと強い者になっているだけに，すなわち君子と成る。

以上の諸例でわかるように，中国語の“成爲”を日本語に翻訳してみると，大体，「と成る」と対応することになる。ただし，《四庫全書》にある用例が年代的に古いことを踏まえて考えれば，中国語の“成爲”が日本語の「と成る」に影響されてできたというよりも，中国語の“成爲”には日本語の「となる」の意味・用法と対応する部分があるので，漢文訓読の際，「と成る」の形で“成爲”に対応させたという可能性があるかもしれない。

## 8. と視る / 視爲 (視為)

### 8.1 『太陽コーパス』にある用例

王立達(1958a)では，中国語の“視爲”は日本語の「ト視ナシテ」の影響を受けてきたものだとしている。しかし，『太陽コーパス』で検索してみると，「ト視ナシテ」の形で使われる用例が見当たらなかった。「と視て」(2例)，「と視る」(9例)，「と視れば」(2例)の用例も少数にとどまっている。このほか，「と視做され・視做し」はそれぞれ4例，「と視為す」(1例)のように，漢字表記「視」を持つ動詞は全般的に用例が少ないことがわかった。

一方，異なる漢字表記を持つ「とみる」のその他の用例を検索してみると，「と見る」は273例，「と見て，と見ては，と見ても，と見てゐる，と見ておる」は239例が数えられるほか，「と看る，と看て」は7例で，「と観る，と観て」は13例となっている。漢字表記のない「とみる，とみて」は5例しかない。つまり，「とみる」の各語形の中で，「と見る」が最もよく用いられたものだとわかる。この結果によって考えると，王立達(1958a)の言う「ト視ナシテ」はもちろん，「と視て・と視る」などを含めて，どちらも明治期によく使われた表現ではないことになる。その用例の中から一部だけ示しておく。

其時小説家は如何にも怨めしげに自分の顔を昵と視て，なぜですか。(1895年3号，窓下几上生「新聞小説」)

故に生物生活の優劣は其機關の精粗如何と視る，生物壽命の長短も亦其機關の精粗如何と視る，而して衆生物の其最も自己に適合する境遇を争ふもの，之を生存競争と稱し，(1895年11号，中西牛郎「文學界の遷流及文學者の壽命」)

敵國艦隊は東西に出没し，前に在るかと視れば忽焉として後にあり，先づ沿海の海運を杜絶し其の商工業を第一に妨害すべく(1895年6号，記者「某大佐の兵事談」) 彼支那の女をば男のために子を生子を養育する物と視做したるとは全く風俗を異にせり。(1895年8号，久米邦武「倫理の改良」)

英國保守黨の機關と視做さるトスタンダード新聞の論に曰く(1895年9号，「英國の日英同盟論」)

但し右年限の満ちたる時は未だ該地方を去らざる住民を日本國の都合に因り日本國臣民と視爲すことあるべし(1895年6号，「日清講和條約」)

このうち、例 の「視爲す」は、例 と例 の「視做す」と同じように、「みなす」と発音すべきもので、たまたま「視爲」の漢字表示になっただけだと推察される。その他の「と視る」の用例を調べてみると、「と見る」の意味・用法とはほぼ共通していることがわかる。また、“視”は「みる」の意を表す古典中国語の動詞で、近代以後の中国語では“看”や“看见”などによってかわられた経緯があるので、「と視る」の用例が現代中国語に翻訳される場合、“視爲”の訳になりにくいのもあたりまえの結果ともいえよう。

## 8.2 《四庫全書》にある用例

《四庫全書》で“視爲”を検索してみると、2987例がヒットした。近代以前の中国語に“視爲”の使い方がすでにあったことは、これによってわかる。また、日本語の「と視る」は、「と見る」に比べて、少数派の用法に過ぎないことも先に述べたし、これらの理由を踏まえて考えると、出典の古い“視爲”が日本語の「と視る」に影響されてできたという王立達(1958a)の説は根拠が足りないということになる。“視爲”の用例は次の通りである。

上都、聖上龍飛之地、天下視為根本。(明代宋濂撰《元史》卷126, 1369) 訳文：  
上都は皇帝一族の聖地で、世の中はこれを根本と見なしている。

自度無能復進、乃筆其區區之見、以與朋友講之。然視為老生常談、一覽而遂置之者多矣。(明代羅欽順撰《困知記》附録、16世紀前半) 訳文：…しかし、ありふれた平凡な話と見なされ、一見してすぐ放っておくものはいかに多いか。

至於農桑學校、王政之本、乃視為虛文而置之、將何以教養斯民哉？(清代張廷玉等撰《明史》卷139, 1739) 訳文：農業と学校は王政の本なのに、虚文と見て放っておいたら何を以って庶民に教養を与えるのか。

凡先王大典、皆視為粗迹、無足怪也。(清代紀昀等編《欽定四庫全書總目》卷25, 1789) 訳文：凡そ先王の典籍なら、みな至理名言と見なすのはあたりまえのことだ。

《四庫全書》にある“視爲”の用例を検討してみると、その意味・用法が現代中国語のそれとほぼ一致することがわかる。また、翻訳を通して日中双方の対応関係を見てみると、“視爲”が現代日本語に翻訳される場合は、「と視る」の表記はもちろん使われないし、「と見る」になることもまれで、「と見なす・と見なされる」といった訳が多く見られる。これに先立って、日文中訳の場合では、「と視る」と“視爲”の対応関係が必ずしも固定されてはいないことを指摘したが、それに加え、中文日訳の場合でも“視爲”と「と視る」の一致度が低くなっている。結論をいうと、王立達(1958a)の前説は一種の臆測に過ぎないものである。

## 9. まとめ

これまでに述べてきたことについて、以下の諸点にまとめておきたい。

(1)「複合辞」はまた「複合助辞」とも呼ばれる。森田良行・松木正恵(1989)は、「どのような表現を複合辞と呼ぶのか」という基準について定説はないが、本書では、単なる語の接続ではなく、表現形式全体として、個々の構成要素のプラス以上の独自の意味が生じ

ていることを一つの目安とした」と述べている<sup>8</sup>。また、飛田良文(2007)は、「複合助辞」について、「形式化した語や助詞・助動詞が複合して、一つの付属語のように機能する表現形式をいう」という定義を与えている<sup>9</sup>。つまり、「個々の構成要素のプラス以上の独自の意味が生じていること」や「形式化」は、複合辞の特徴を考えるときのポイントとなっている。これを踏まえるなら、本稿でとりあげたものの中で、「と認める・と視る」などは必ずしもその枠に入るわけではないが、中国語には対応できそうな表現があるので、一応日中比較の対象として取り入れたのである。

(2) 国語史の分野において、日本語の語彙と表現にもたらした漢籍漢文の影響を対象とした研究成果が豊富に蓄積されている<sup>10</sup>。なかでも、山田孝雄氏はその著『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』(1935)で、40の項目にわたって、「ごとし・いはく・ねがはくは」など58種の表現と漢文訓読の関わりを論じた内容は本稿との関連がとくに強い。ただし、同著では、「よりて」と「由・因・縁・仍」などの漢字の訓読法に言及した一節があったものの、漢文の“由於”には直接触れていない。また、本稿でとりあげたその他の複合辞と漢文訓読の影響関係についての研究もないようである。

(3) 複合辞研究の課題について、『日本語学』(特集・複合辞)の巻頭にある「特集の趣旨」(1989)では、「複合辞あるいは複合助辞、すなわち複合のかたちで助詞・助動詞等相当のはたらきをするものは、近代日本語の特徴的形式の一つであって、古代日本語にはごくすくないようだ。……大局からして、複合辞の発達は、文法的にも語彙的にも、近代日本語の特徴の一つだと言っていい」などと述べている<sup>11</sup>。また、飛田良文(2007)は「日本文法の体系の中に位置付け、一語一語の歴史を解明していく必要がある」としている<sup>12</sup>。これらの論述はいずれも複合辞に関する通時的研究の重要性に言及しているが、筆者の管見では、いまだにこのような課題を取り上げた論文は見当たらないようである。

(4) 「漢文系複合辞」とは耳慣れない言葉であるが、筆者は次のように考えている。複合辞の中には、明治期の漢文体に由来したと思われるものがある。たとえば、本稿でとりあげたものはその一部である。このうち、「に関する・に対する」のように音読みのものであれば、「に基づく・に由る・と成る」のように訓読みのものであるが、さしあたり、「漢文系複合辞」と呼ぶことにする。これに対して、和文系の文学作品や口語体の文章に由来したと思われるものについては、「和文系複合辞」と名付けることができる。その例として、「するやいなや・からには・ものなら・より仕方がない」などがあげられよう。複合辞の歴史を探るような研究では、この「漢文系」と「和文系」の分け方が役に立つだろうと思われる。

(5) 本稿でとりあげた複合辞は、結果的にはいずれも『太陽』雑誌が出版された時点ですでに出来上がっていた。そのため、これらの複合辞の発生を解明しようとするれば、『太陽コーパス』だけでは力が及ばず、明治初期をカバーするコーパスが必要になってくる。今度の調査でわかるように、近代語のコーパスは語彙の歴史を探るときに役立つだけでな

<sup>8</sup> 森田良行・松木正恵(1989)の凡例(p.xi)を参照。

<sup>9</sup> 『日本語学研究事典』のp.221を参照。当該「複合助辞」の項目は飛田良文氏の執筆による。

<sup>10</sup> 参考文献にある山田孝雄(1935,1940),築島裕(1963),小林芳規(1967),および柏谷嘉弘(1987,1997)などは代表的なものとしてあげられる。

<sup>11</sup> 『日本語学』(特集・複合辞)1984年10月号,明治書院

<sup>12</sup> 飛田氏が執筆した「複合助辞」の項目(『日本語学研究事典』のp.221)を参照。

く、飛田（2007）のご指摘の通り、複合辞の「一語一語の歴史を解明していく」上にも大いに利用されるべきものである。

（6）本稿は王立達（1958a）の仮説を検証するための調査であるが、結果から言うと、《四庫全書》にある用例が年代的に早いので、中国語の“基於、關於、對於、由於、認為、成爲、視爲”は日本語の影響で新しく造られたという可能性が低い。ただし、こういった言い方は近代以前の中国語にはすでにあつたことが明らかになったものの、20世紀初期の日本書翻訳ブームの中で、日本語の「に基づく・に関する・に対する」などがどのように中国語に訳されていたか、日中間の対応関係が実際にあつたかどうかについては、推測ではなく、当時の資料によって実証する必要がある。また、王立達（1958a）の説とは逆に、これらの日本語の複合辞はいつ、どのように形成されたのか、中国語からの影響があつたかどうかについても、別の視点からの研究が必要なので、今後の課題としたい。

## 文 献

- 山田孝雄（1935）『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』宝文館  
山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館  
国立国語研究所報告3（1951）『現代語の助詞・助動詞 用法と実例』秀英出版  
永野賢（1953）「表現文法の問題 複合辞の認定について」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂  
王立達（1958a）〈現代汉语中从日语借来的词汇〉《中国语文》2月号  
郑奠（1958）〈谈现代汉语中的“日语词汇”〉《中国语文》2月号  
张应德（1958）〈现代汉语中能有这么多日语借词吗？〉《中国语文》6月号  
王立达（1958b）〈从构词法上辨别不了日语借词一和张应德同志商讨汉语里日语借词问题一〉《中国语文》9月号  
築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会  
小林芳規（1967）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会  
『日本語学』（特集・複合辞）1984年10月号，明治書院  
柏谷嘉弘（1987）『日本漢語の系譜 その摂取と表現』東宛社  
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』株式会社アルク  
河原崎幹夫監修（1995）『辞書で引けない日本語文中表現』北星堂書店  
柏谷嘉弘（1997）『続日本漢語の系譜』東宛社  
砂川有里子ほか（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版  
国立国語研究所報告122（2005）『雑誌 太陽 による確立期現代語の研究』博文館新社  
飛田良文（2007）「複合助辞」『日本語学研究事典』明治書院

## コーパス

- 《文淵閣四庫全書电子版》香港迪志文化出版有限公司、上海人民出版社，1999  
『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所資料集15，博文館新社，2005